

水の想い出 ⑥5

私の住む河内地区は、自然や建物などの文化遺産を後世に残そうと努力している人たちの元気な姿をよく見かけます。旧町屋変電所を中心

に整備され、悠々と流れる里川と赤レンガの建物の美しい風景をこの上なく愛してやまない人たちが、自主的に清掃や草刈をしているのです。近年ここを訪れる人たちが増えました。ハイキングコースとして定着した黒磯岳の絶景で有名な黒磯バッケもあり、この地の自然に魅了され何度も足を運ぶ常連さんもおおぜい見かけます。

町屋町は昔、棚倉街道の宿場町として栄えました。その歴史は通りのあちこちに見られます。生活用水や防火に利用された水路（江川）沿いの古い民家や土蔵、旅籠風の家々などに、今もその面影を残しています。

縁あって36年前に移住した私は、ある日、旧河内小学校下の滑入橋に立ち、清流と赤レンガの建物の美しい風景に釘付けになり、とても心を癒されたのを覚えています。子どもたちを連れてこの橋下の川の窪みで、網で川魚を捕って遊んだりしました。ドジョウ、ハヤ、オイカワ、クチボソ、川エビなどたくさん捕れました。今も川原の地形はほとんど変わっていません。時々孫たちをこの川原に誘います。しかし孫たちは、スマホやゲーム機に夢中で、魚とりにはあまり興味を示しません。これも現実です。でも、その川原には孫たちに代わって子どものように一心に網を振り回している自分がいます。

(和田 勝美)



豊かな自然や地域の特色を生かしたお祭りやイベントが市内各地でおこなわれています。今回は、その中から「行灯の赤レンガと銀杏まつり」と「竜神峠鯉のぼりまつり」の華やかな表舞台を支える「裏方」にスポットを当てご紹介します。

表舞台を支える

裏方

あかり 行灯の赤レンガと銀杏まつり

(後藤 百合子 関根 悅美 相原 早苗)



第1回赤レンガと銀杏まつり

町屋発電所の変電施設として明治42年に建てられた通称「赤レンガ」は、平成11年に国の登録有形文化財に登録されました。

この建物の保存活動が始まってから10年目の平成16年秋「第1回赤レンガと銀杏まつり」が開催されました。

故櫛田七雄さん（当時88才）達の提案で、会場に並べられた行灯。その予想以上の美しさに、実行委員会スタッフは息を呑んだそうです。

共有するもの、それは「地域愛」

会場への入口「滑入橋」を渡ると、想像を超えた別世界が目の前に広がります。

「『わーすごい！』来場した方々のその一言を聞いたとき、生まれ育ったふるさとの素晴らしさと「地域愛」をあらためて感じた」そうです。

関わるスタッフ一人ひとりのおもてなしの心と責任感がまつりを作り、アイデアと行動力がまつりを充実させていきます。



第9回赤レンガと銀杏まつり

1500個を超える手作り行灯は地元の竹を利用しています。当初、竹に直接貼り付けていた紙を、筒状に貼り合わせて取り外せるようにしたことで、保管や絵付け、点火も簡単になり、準備時間が3分の1に短縮できたのだそうです。反省を次に生かす工夫、地道な努力がまつりを支えています。



以前の収納の様子



今は重ねてしまえるように工夫されました



気になる一文字、どうやって並べているの？



かわちふれあい橋を少し上がった付近が、文字を見るベストポジション。行灯を並べる作業は携帯電話を使って指示を出します。細かい部分になると伝えられないことも多く、土手を何十回も上り下りするそうです。2年前からは道路側の土手にも文字を描くようになりました。斜面に行灯を固定する方法にもスタッフの経験とアイデアが生かされています。

希望の灯り～岩手県大槌町との交流～

2011年、東日本大震災で大津波により被害を受けた大槌町。「住民の3分の1が避難し、自治会への参加者も少なく、みんなやる気を無くしている。」「夏祭りをしてみんなに希望を持って欲しい」との切実な思いを伝え聞き、支援活動で現地を訪れた常陸太田ライオンズクラブの代表のかたに108個の行灯を託しました。

秋には新米や支援物資を届け、大槌町の保育園児に行灯の絵を描いてもらうなど交流が続きます。



大槌町夏まつり（撮影：根本 龍司さん）



子どもたちの行灯

第10回行灯の赤レンガと銀杏まつり

11月9日（土）、10日（日）旧町屋変電所周辺で開催されます。
行灯への点灯は15時30分予定です。

【第10回記念 あんどん一文字募集】

◆祭りを彩るあんどん一文字を募集します（広域農道土手設置用）

はがきに ①希望する文字 ②お名前 ③ご住所 ④電話番号 を記入の上

〒311-0311 常陸太田市町屋町1254

河内の文化遺産を守る会事務局まで

（問い合わせ 090-3149-2353 檜山）



締切：10月31日（必着）一人1票

私たちを魅了するおまつりの裏側には、人知れず努力する姿がありました。そこには、回を重ねての工夫や、地元の人たちの地域を大切に思う気持ちがうかがえます。これから各地で彩りある催しも開かれますので、裏方さんを想像しながら楽しんでみてはいかがでしょうか。

（後藤 百合子）

竜神峡鯉のぼりまつり

(武藤 千絵子 武藤 卓 白石 百合乃)

五月の空、水府の竜神峡では、緑の風に1000匹を越える鯉のぼりが舞います。あの鯉のぼり達は、いつ、どんな風に「鯉の橋渡し」をされたのでしょうか？その裏舞台に、伺いました。

出番を待つ鯉のぼり達 高倉交流センター（旧 高倉小学校体育館）



4月、まだ寒さが残る体育館で作業は行われていた。鯉のぼりの口に取り付けるロープを頑丈にするために、ロープの先を焼く人。そのロープを同じ長さに切っている人。鯉のぼりの大きさを合わせたり色の順番を考えながら、綺麗に畳んで、まとめていく。まさに、熟練の業。体育館の入り口付近に、ステージ、窓枠にまで、所狭しと並べられた鯉のぼり。たくさんの鯉のぼりで埋めつくされた体育館は、圧巻のひとことでした。

竜神大吊橋へ



鯉のぼりを持って崖を登る



等間隔に進んでいく鯉のぼり

レストハウス脇の崖にはしごを掛け、3～4匹ずつ2人がかりで持ち、狭い山道を登る。この作業を数百回と繰り返した後、いよいよ出番の時を迎える。この日は、時折強い風が吹いていたが、ワイヤーに等間隔に取り付けられ、風にあおられながらも、徐々に空へと送り出されていた。

原点回起

3

「TwitterとFacebook」

これまで出会うことがなかった地域の人や世代の違う人たちとの情報交換の場を与えてくれるSNS（Social Networking Service ソーシャル・ネットワーキング・サービスの略）。自分の工夫次第で必要な情報を得ることができ、それぞれの特徴にあった使い方をすることで効率よくコミュニケーションを広げたり深めたりすることができます。

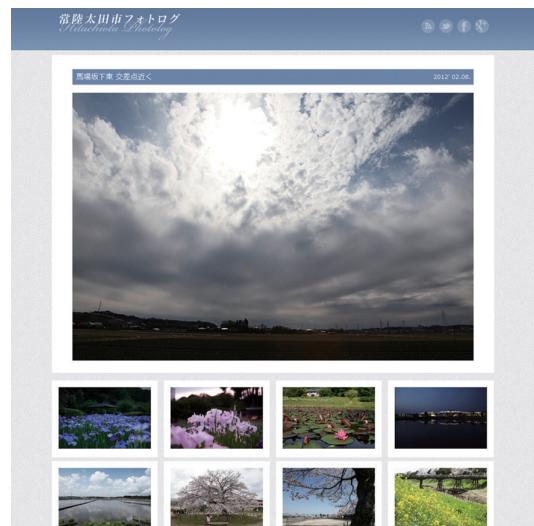
例えばtwitter（ツイッター）は、その人の発信する情報に興味があれば、見知らぬ人同士でも会話をすることができます。facebook（フェイスブック）は、つながった知人とより濃密に交流を深めていくことに適していて、個人的な考え方や行動を知ることもできます。

ある人が私のtwitterへ「常陸太田市に住んでいます。素敵な写真ばかりですねえ」と書き込んでくれたのが交流の始まりでした。「facebook・twitter・フリーブログ・ホームページを持っていますが、ブログの流れてしまう情報には、足りない部分を感じました」というその人の悩みを知り、自分で言えばお役に立てるかもしれないと思い、帰郷して初の地元のブログ更新もできるWebサイトをお手伝いさせていただきました。それがきっかけで、フォンズの表紙の

デザインのリニューアルやこのコラムを書く機会をいただきました。

SNSは、知らない人同士をつなぐだけではなく、交流を通してつながった人ととの関係性を強め、それが思わぬ方向へと導いてくれたりもします。SNSはネット上に存在していますが、ネットの外でこそ、その力を發揮し、SNSが作ってくれる「人ととのつながり」は、まだまだこれから無限の可能性を秘めているといえます。

（武藤 卓・千絵子）



出会いのきっかけとなった写真



私が撮った「常陸太田市」

「風が見える丘 プラトーさとみ」
匿名さん

応募・投稿先

フォンズ・ネットワーク事務局
常陸太田市生涯学習センター内

〒313-0061 茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL:0294(72)8888 FAX:0294(72)8880
E-mail:shogaku-c1@city.hitachiota.lg.jp

次号締切は10月25日です。（応募作品が多い場合はご紹介できないことがあります。）

生涯学習情報誌「フォンズ」は、2~3ヶ月毎に発行し、市内全世帯に配布され、大きな宣伝効果が期待できます。ぜひご利用下さい。

◆広告料(1回あたり)※会長が指定するページの最下段

- ① 縦4.5cm×横 8.8cm／10,000円
- ② 縦4.5cm×横17.9cm／20,000円

問合せ フォンズ・ネットワーク事務局(生涯学習センター内)
TEL:0294-72-8888
URL:<http://edu.city.hitachiota.ibaraki.jp/gakushu/>

広 告



『私の目指す道』

毎日畑と家の往復をしながら、自分は一体どんな農家を目指しているのか?と自問自答する時がある。それが最近やっとこれだと思う考えに至った。

私の目指すのはアーティスト農家。自分を畑と野菜に投影して表現する農家でありたい。

画家は展覧会をしたり、音楽家はコンサートをするが、私の発信する場所は畑の姿にあったり、毎週お届けする野菜ボックスの中にある。それを味わってくれる人とつながり、美味しい食卓を作ってゆくお手伝いをする。それが農家としての私の仕事だ。

毎回届ける野菜ボックスの中に、小さなお便りを入れる。この野菜はこう食べてほしいとか、これとこれは相性がいいとか、農家生活13年で覚えてきた豆知識を、食べてくれる人にも伝えたいと思う。また、畑仕事をしながら思うこと、ちょっと真面目な農業問題のこと、政治のこと、自然環境のこと、そんなことも野菜とともに

もに伝えたいと思う。食は根源的に人と人をつなぐものだという実感が、十数年の経験の中にある。

アーティストとは自分の道を知り、それをそれぞれのツールを使って表現する人だと思う。だとしたらきっと私には、畑を耕し作物を作ることが自分のツールであるし、作品はできた野菜と、その野菜が育つ畑の姿や土地の風景。

畑という広大なキャンパスに夫とふたりでそれぞれの夢を描いてゆく。土作りから、種の播き方、植え方、仕立て方まで、作物が出来上がるまでの様々なことに思いを巡らせながら進める作業はクリエイティブな仕事だ。この尊い仕事をいつまでも尊いと感じながら続けてゆきたい。

(布施 美木)



人種継承会

2

第2回目となる在来作物の紹介は、市の最北部に位置する里川町で栽培されている里川カボチャです。里川カボチャは、薄ピンク色の皮とホクホクした食感が特徴の、市内でも知る人ぞ知る絶品のカボチャです。里川町の町会長である荷見誠さんは、「『里川の土手カボチャ』として昔から地域で作られていましたが、他種との交雑によって原種が失われつつあったため、平成21年度から町会をあげてその品種の復活と固定化に取り組んでいます。」とお話をしてくださいました。

地域をあげてその土地に伝わる作物を守る人々の姿はまさに、常陸太田市の「よみがえりのレシピ」と言えるのではないでしょうか。
(種継人の会 笹川 貴吏子)

「よみがえりのレシピ上映プロジェクト in 常陸太田」は、「種継人の会」と名称を変更しました。



里川地区の方とボランティアの大学生



[在来作物データ]

名 称 里川カボチャ

品 种 カボチャ

特徴・性質 実の色はピンクオレンジ色。標高600~800メートルの高地が生み出す寒暖の差の恩恵によりとても甘みのあるカボチャとなる。里川町の地区外で育てても、この甘味を引き出すことができないと言われている。

収穫時期 10月上旬から11月中旬

食 べ 方 煮物やスープの他にプリンやケーキなど幅広い食べ方が可能。

7
おすすめ
ファンズ

リレー エッセイ 「思い出の絵本」

『ムーミン谷の冬』

~65~

(馬場町 塩原 慶子)

客間の飾り棚の一番下、地袋にずらっと並んだ「児童文学全集」。固い紙のケースに入って、少し埃もかぶっている、それが一番古い「本」との思い出である。「小公女」「十五少年漂流記」「三銃士」「ドリトル先生」などの定番作品の中で、もっとも数多く読み返したのは「ムーミン谷の冬」だった。20巻を超える人気シリーズで、全集中には他にもう1冊ムーミンシリーズがあったが、お気に入りはこちらだった。大好きだったこと、何度も読んだことは覚えているが、肝心のストーリーやムーミン以外の脇役などはあまり記憶はない。印象に残っているのは、暗くて寒い、誰もいない一面の雪の世界。

長い冬は冬眠して過ごすムーミンたち。ところが、なぜかムーミンだけが真冬に目覚めてしまう。どんなに呼んでも目を覚まさないママとパパ。ムーミンはミーたちを起こして、子どもだけで気ままな冬の生活を楽しみ始める。そして春になるとちゃんとママ達が目覚める、というストーリーで、今読み返せば魅力的な脇役も大勢出てくる巻だったのだが、自分が好きだったのは「大人のいない自由な世界」と「孤独な冬」のほう。後年、ジブリアニメの「千と千尋の神隠し」を見たとき、「似てる!」と思った。両親がいなくなってしまった世界で、いろんな冒險を経て、元の世界を取り戻す、子どもが大人になるときの通過儀礼を描いた「おとぎ話」は日本も北欧も同じだったんだ、と。そんな理屈は横に置いても、雪に閉じ込められた世界で感じる孤独と自由、春になってママやパパが目覚めたときの安心感と自由の喪失感が、なんともいえず心地よかったです。一人で冬を生き抜いた自信、もう子どもじゃないぞという自負と、誰かに守られ安心していられる子ども時代にはもう戻れないんだと言う一抹の寂しさ。この「ムーミン谷の冬」でいろんな心の動きを見つけたのだった。TVアニメのふわふわしたキャラクターイメージをムーミンに持っている方にも、ぜひ本を手にとってもらいたいと思う。

(前号でご紹介した市毛誉夫さんは、次号に掲載いたします。)



ほつ
とひといき

オゼイトトンボ



体長3~4cmの青くてきれいなイトトンボです。他の青いイトトンボとは、胸の黒線や腹部の模様などで見分けます。名前のオゼはミズバショウで有名な尾瀬湿原から来ています。名前の通り山地の高層湿原を中心に分布しています。東日本の特産種で、茨城県は分布の南限になります。県内でも北茨城市や高萩市、常陸太田市里美などの県北山地の湿地に見られます。しかし、ひたちなか市や那珂市、茨城町の低地でも生息地が見つかっており、常陸太田市内の低地でも生息地があるかもしれません。成虫は5月から8月まで見られます。湧き水のあるきれいな環境の湿地にいます。交尾時には写真のような素敵なハート型を作ります。田んぼの脇でこの素敵なハートを探してみませんか。

(佐々木 泰弘)

ちよつとひといき

食の故郷は田んぼにあり「ゆうゆう」



第二の人生を考える時に、小麦粉やグルテンを使わない「田んぼ」由来のレシピに出会い、米粉を使ったレシピの数々を学んできたオーナーご夫妻は「子どもたちに安心して与えられるおやつを、おかあさんが自宅で作れるように」と米粉を使ったパン教室も開いています。食材の本来のうまみを活かした野菜中心のメニューは、お腹がいっぱいになってしまっても、もたれることはあります。瑞龍地区の見晴らしのよい丘にあるレストランは、出されるメニューだけでなく、そこから眺める田んぼの景色もごちそうの大部です。

(塩原 慶子)

- 営業時間 12:00~17:00
- 定休日 月・火・金曜日
- 住所 常陸太田市瑞龍町931-1
- 教室 金曜・日曜(予約制)
- 電話 0293-33-6860
- 田んぼのパンと季節の野菜プレート…1,500円
田んぼのパン・お菓子販売 他



陸太田市里美などの県北山地の湿地に見られます。しかし、ひたちなか市や那珂市、茨城町の低地でも生息地が見つかっており、常陸太田市内の低地でも生息地があるかもしれません。成虫は5月から8月まで見られます。湧き水のあるきれいな環境の湿地にいます。交尾時には写真のような素敵なハート型を作ります。田んぼの脇でこの素敵なハートを探してみませんか。

(佐々木 泰弘)



常陸太田の地名話 ~12~

はた
機 初

【常陸太田市機初地区】

建てて、初めて内幡（うつはた）という布を織った」とある。初めて機織りをしたところから機初の名がついたという。また、江戸期～明治22年の村名幡村は、この内幡や長幡部神社が所在することに地名が由来しているという。明治22年町村制施行により、幡村、高貴村など6か村が合併して機初村が誕生した。昭和29年常陸太田市の一部になり、村制時の幡村などの大字名は町名となった。

(川松 博)

<参考文献>「常陸国風土記」「新編常陸国誌」「常陸太田市の歴史散歩」「茨城県地名大辞典」



『常陸国風土記』には、古来のはなしとして「崇神天皇の世になって、長幡部の祖となった多亘命（タテノミコト）が美濃の国からのがれて久慈の国に移り、機殿を



常陸国風土記にでてくる長幡部神社

新太田点描③

今宮義透と正宗寺

享保十七年（一七三二）九月、秋田藩佐竹氏家老の今宮義透は、江戸から國元秋田への帰国の途中に水戸藩徳川氏の支配地である常陸国内に足を踏み入れた。そこはかつて、約四百年の長きにわたり佐竹氏が領主として支配した河北

三郡（久慈・多賀・那珂）に所在する、先祖由緒由縁の地を訪ねるのが目的であった。

慶長七年（一六〇二）七月、佐竹氏の出羽国秋田への突然の国替えに際して家臣たちの間では、親或いは兄が土着帰農して常陸に残り、子や弟は領主に従つて秋田へ移るなど親子兄弟間で様々な離別があつた。

ところで、佐竹氏に替わって徳川氏が太田・水戸地方等常陸国の中半分を支配するようになると、新しい藩主に遠慮してか太田地方と秋田に別れ住んだであろう親子、兄弟の間では殆ど交流が見られなくなつた。

このため地元常陸に残り土着帰農した人々と、秋田に移り佐竹家の家臣として仕えた者の間では、お互いそれぞれに「国替え時の別れの様子」を語り草として、今も子孫に伝えるなどして残している。

ただ、秋田への国替え以降に二回ほど佐竹家家臣による旧佐竹領内の先祖探訪が行わってい。その顛末は『常陸御用日記』（正徳五年）、『金

砂日記』（元禄十年）として公刊されているのでここではふれない。

さて、前述の今宮義透であるが、江戸から常陸国に入り水戸・太田を経て秋田へ向かつたと思われるが、その通行経路や足跡は判然としない。ただ、義透は、かつて佐竹氏歴代の墓のあつた太田増井の正宗寺へ赴き、往時を懷かしみながら先祖の位牌を拝み、時の住職らと会話を楽しんだことを書き記している。（写真参照）

享保十七年壬子年九月はじめの比
むさしより出羽秋田へ下向の
折からたまく故国常陸増井の

正宗寺にもうて、
諸先君の尊牌をおかみなり山主に

往時を語り侍りて讀る

佐竹右京兆義舜公長庶子永義七世嫡孫今宮大學

源 義透

はる／＼と
この山寺を

尋ねきて

むかしの跡を
とふか嬉しき

佐竹右京兆義舜公長庶子永義七世嫡孫今宮大學

源 義透

享保十七年九月はじめの比
むさしより出羽秋田へ下向の
西高寺よりまづく
諸先君の尊牌をおかみなり山主に
往時を語り侍りて讀る
(吉成 英文)

さて、正宗寺を発つた義透は棚倉街道を北へ向かい秋田に帰るのであるが、かつて今宮氏の菩提寺のあつた泉福寺へも立ち寄っているが、これについても何れ機会を見て紹介したい。

支え、一時期ではあるが小里城主（在・小妻町）になつてゐる。

慶長七年、今宮氏は領主佐竹氏の秋田国替えには随行したが秋田城下に移らないで角館に留まつてゐる。ここでかつての家臣だった者を組下預かりとして統率支配していた。この国替え時に今宮氏の菩提寺であつた松庵寺も小里（大中町）から角館に移つてゐる。その跡へ小木津から曳寺されたのが現在の泉福寺である。